

一、禊祓詞（天津祝詞・平田篤胤伝）

たかまのはら かむづまりま
高天原に神留坐す

かむろぎ かむろみ みことともち
神魯岐神魯美の命以て

すめみおやかむいざなぎのみこと
皇御祖神伊邪那岐命

つくし ひむか たちばな を ど
筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原に

みそぎはら たま とき あれませ はらひど おほかみたち
御禊祓ひ給ふ時に生坐る祓戸の大神等

もろもろまがことつみけがれ
諸々枉事罪穢を

はうひだま きよめなま まを こと よし
祓賜へ清賜へと申す事の由を

あまつかみくにつかみやはよろづ かみたちとも
天津神国津神八百万の神等共に

あめ ふちこま みみふ たま きこしめ
天の斑駒の耳振り立てて聞食せと

かしこかしこ まを
恐み恐みも白す

おほはらひのことば
（中臣祓詞・宮地水位伝天津祝詞之太祝詞）

たかまのはら かむづまり ま
高天原に神留坐す

すめらがむつか むろぎか むろみ みこともち
皇親神漏岐神漏美の命以て

やほよろづ かみたち
八百萬の神等を

かむはかりはかりたまひ
神議議賜て

かむつどへつとへたま
神集集賜ひ

あがすめみまのみこと
我皇孫命は

とよあしはら みずほ くに
豊葦原の水穂の国を

かむはらひ はらひなま
神掃に掃賜ひて

こととひ いはねきねたちくさ かきは ことやめ まつり
安國と平けく所知食と事依し奉き

かくよさ まつり くぬち あらぶるかみども
如此依し奉し國中に荒振神等をば

かむとは とほしたま
神問しに問賜ひ

あめ やへぐも いはねきねたちくさ かきは ことやめ まつり
天降依し奉き

あまくだしよさ まつり よも くに
天の八重雲を伊頭の千別に千別て

おほやまとひたかみ くに
如此依し奉し四方の國中と

あめ いはくらはな
天の磐座放ち

やすくに さだめまつり
安國と定奉て

したついはね みやばしらふとしきた
下津磐根に宮柱太敷立て

二、大祓詞

（中臣祓詞・宮地水位伝天津祝詞之太祝詞）

母と子と犯罪
母が子犯せる罪
己が母犯せる罪
己が白人胡久美
死膚断
生膚断
國津罪とは
許許太久の罪を
天津罪と法別て
天津罪とは
屎戸
逆剥
生剥
さかはぎ
いきはぎ
くそへ
くそへ
さかはぎ
いきはぎ
しきまき
しきまき
ひはなち
ひはなち
みぞうめ
みぞうめ
あはなち
あはなち
畦放
畦放
樋放
樋放
頻蒔
頻蒔
串刺
串刺
過犯けむ雜々の罪事は
天津罪と

高天原に千木高知て
すめみまのみこと みづ みあらかつかへまつり
皇孫命の美頭の御舎仕奉て
あめ みかげひ みかげ かくりまし
天の御蔭日の御蔭と隠坐て
あめ やすくに たひら しろしまさ くぬち なりいで
安国と平けく所知食む國中に成出む
ますひとら あまつみ
天の益人等が
あめ あやまちをかし くさぐさ つみと
過犯けむ雜々の罪事は
天津罪と

子と母と犯罪
けものをかせるつみ

畜犯罪
けものをかせるつみ

昆虫の災 高津神の災
はふむし わざはひ たかつかみ わざはひ

高津鳥の災
たかつとり わざはひ

畜仆し
けものたぶ

まじものせるつみ
蟲物為罪

許許太久の罪出む
おほなかとみ つみいで

如此出ば
かくいで

天津宮事以て
あまつみやごともち

※「大中臣」という言葉は、水無月と師走の晦の大祓式のみ奏上す。

天津金木を本打切末打断て
あまつかなぎ もとうちきりすへうちたち

千座の置座に置足はして
ちくら おきくら おきたら

八針に取辟て
やはりとりさき

天津菅曾を本剣断末剣切て
あまつすがそ もとかりたちすへかりきり

天津祝詞の太祝詞事を宣れ
あまつのりと ふとのりとこと

天津祝詞の太祝詞事を宣れ
あまつのりと ふとのりとこと

※神仙道道士は、ここで天津祝詞の太祝詞言を密唱せよ。一般人は一呼吸間鎮魂せよ。

如此乃良ば
かくのら

天津神は天の磐門を押披て
あまつかみ あめ いはと おしひらき

天の八重雲を伊頭の千別に千別て所聞食む
あめ やへぐも いつ ちわき ちわき きこしめさ

国津神は高山の末短山の末に上坐て
くにつかみ たかやま すへひきやま すへ のぼりまし

高山の伊穂理短山の伊穂理を搔別て所聞食む
たかやま いほりひきやま いほり かきわけ きこしめさ

如此所聞食ては
かくきこしめし

※「皇孫命の朝廷を始て天下四方国には」という言葉は、水無月と師走の晦の大祓のみ奏上す。
すみまのひと みかど はじめ あめのしなよものくに

罪と云ふ罪は不在と

しなと
かぜ
あめ
やへぐも
ふきはなつこと
ごと

朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹掃事の如く

おほつべ
を
おほぶね
へときはなちとときはなち
おほわだのはら
おしはなつこと
ごと
大津辺に居る大船を舳解放艤解放て大海原に押放事の如く

のこ
つみ
あらじ

はらひたまきよめたま
祓給ひ清給ふ事を

高山之末短山之末より

佐久那太理に落多支都速川の瀬に坐す

瀬織津比売と云ふ神大海原に持出なす
かくもいでいな
てすいこざ

元の鹽の八百道の八鹽道の鹽の八百

卷之三

速開都比売と云ふ神持可可呑てす
はやあきつひめ かみもちかのかのみ

かくかかのみ
如此可可呑てば

いぶきどぬし
氣吹戸に坐す

氣吹戸主と云ふ神

根國庭園に氣吹

好此乞叫於一
ねのくにそこのくに ま
根国底国に坐す

速佐須良比売と云ふ神

持佐須良比失てむ

かくうしなひ

はらひたまきよめなまこと
祓給ひ清給ふ事を

天津神
あまつかみ
くにつかみ

国津神
くにづかみ

祓戸神等
はらひどのかみたち

とも
畏み
きこしめせ
共に所聞食と
かしこかじこ
まを

畏み
も白す
まを

3

三、三種太祓（ト部神道）

みくさのおほはらひ
「天津祓」

うらべしんとう
(ト部神道)

吐普加身依身多女
くにづはらひ
とほかみえみため

「国津祓」

かんごんしんそんりこんだけん
寒言神尊利根陀見

「蒼生祓」
あをひとくさのはらひ
かんごんしんそんりこんだけん
寒言神尊利根陀見

波羅伊玉意清喜餘目出玉
はらひたまひきよめてたまふ

四、六根清浄太祓（ト部神道）

あまたらすすめおほみかみ
天照皇大御神の宣はく。

ひとすなはあめのしたかみ
人は即ち天下の神物なり。

すずべからく静め謐まることを掌る心は即ち神明との本主たり、
こころのかみいた
心神を痛ましむること莫かれ。
このゆへ

是故に、

めに諸々の不淨を見て、心に諸々の不淨を見ず。

耳に諸々の不淨を聴きて、心に諸々の不淨を聽かず。

はなもろもろけがれ
鼻に諸々の不淨を香ぎて、心に諸々の不淨を香がず。
こころもろもろけがれ
くちもろもろけがれ
口に諸々の不淨を言ひて、心に諸々の不淨を言はず。
こころもろもろけがれ
みもろもろけがれ
身に諸々の不淨を触れて、心に諸々の不淨を触れず。
こころもろもろけがれ
意に諸々の不淨を想ひて、心に諸々の不淨を想はず。
このとききよいさぎよこと
此時に清く潔き事あり。

もろもろのりかげかたちごと
諸々の法は影と像の如し。

みきよこころいさぎよこと
身清く心潔ければ、假にも穢るる事无し。

ことばと
説を取らば得べからず。

みなはなよこのみ
皆、因従りぞ、業とは生る。

わがみすなはむつのねきよくきよらか
我身は則ち六根清浄なり。

むつのねきよくきよらか
六根清浄なるが故に、五臓の神君安寧なり。

いつをさめかみやすくやすらか
五臓の神君安寧なるが故に、天地の神と同根なり。

天地の神と同根なるが故に、万物の靈と同體なり。
萬物の靈と同體なるが故に、為す所の願ひとつして成就すと云ふことなし。
し。
无上靈宝神道加持

五、神變自在變穢成淨之上科津祓（ト部神道）

高天原に神留坐す皇親神漏岐神漏美の命を以て
死穢産穢病穢妙犯穢月水穢并に

穢食雜食穢の諸の不淨をば

科戸風の吹払ふ事の如く

焼鎌の敏鎌を以て打払ふ事の如く

水を以て火を消すが如く

やきかまとかまもちうちはらことげこと

みつもちひことげこと

33

湯を以て雪を消すが如く
火を以て毛を焼くが如く
毛頭毛根に至るまで
あるほど
一切の穢氣不淨をば
ひむかをと
日向の小戸の桧原の上瀬の
太はらひたま急きよめなまき潮しおにて滌あらひすす去よしきて
祓はらひ賜しおひ清おんみみ賜ふ事ことの由よしを
左男鹿さをしかの八やつの耳おんみみを振ふりたて立たてて
聞食きこしめせと申まをす

聞食せと申す

身は安く
言は美しく
意は和きて

六、神通自在心源清浄之下科津祓(ト部神道)

諸の悪業煩惱邪念猛慮をば
もろもろあしきことはざわづらひなやみよこしまこころだけきをもはかり

日向の小戸の桧原の
ひむかをとあはきがはら

下瀬の弱く和柔たる潮の如く
しものせやはらやはらきうしはごと

罪と云ふ罪咎と云ふ咎は不在と
つみいふつみとがいとがあらじ

祓賜ひ清賜ふ事の由をば
はらひたまきよめだまことよし

左男鹿の八の耳を振立て聞食せと申す
さをしかのやつおんみみふりたてきこしめまを



七、身禊祓詞（伯家神道）

みそぎはらひのことば
はっけしんとう

高天原に神留座す
たかあまはらかむづまりま

皇御親の神伊弉諾尊
すめみおやかみいざなぎのみこと

衆神御禊の大水時に生坐せる神
もうかみみそぎおほみときなりまかみ

八十禍津日神
やそまがつひのかみ

大禍津日神
おほまがつひのかみ

神直日神
かむなほひのかみ

大直日神
おおなほひのかみ

底津海津見神
そこつわたつみのかみ

底筒男尊
そこつつをのみこと

中津海津見神
なかつわたつみのかみ

中筒男尊
なかつつをのみこと

上津玉積神
うはつたまつみのかみ

上筒男尊
うはつつをのみこと

及祓殿の諸神祇
およびはらひど もろかみがみ

諸の障穢を
もろもろさはりけがれ

祓ひ清むる事の由を
はらきよことよし

平けく安けく
たひらやすら

御諫給ひて聞食せと白す
まいさみたまきこしめまを

八、四十七音之傳

(日文祓詞・ト部神道)

「人法惣修章」

人含道善命

「親子別修章」
報名親子倫

「心別修章」

元因心顯煉

「君別修章」

忍君主豊位

「臣別修章」

臣私盜勿男

田畠耘女蠶

「家別修章」

續織家饒榮

「理法別修章」

理宜照法守

「攻惡別修章」

進惡攻撲欲

「削欲惣修章」

我刪

ひふみよいむなやこともちろらねしきるゆふつわぬそをたはくめかう
おえにさりへてのますあせゑほれけ

九、天之数歌（布瑠部神言・宮中鎮魂祭）

あめのかずうた

ふるへのかむこと きゅうちゅうらんこんさい

一二三四五六七八九十

ひとつたみよいつむゆななやこここのたり

百千萬

ももちよろづ

布瑠部由良由良止布瑠部

ふるへゆらゆらとふるへ

第二章 祝詞解説



一、禊祓詞（天津祝詞・平田篤胤伝）解説

今回収録した禊祓詞（天津祝詞）は、平田篤胤大人がト部神道や伯家神道などの古伝の禊祓詞（身曾貴太祓）などを参照して構成した祓詞である。

明治時代には全国の神社や教派神道などで、修祓（しゆほつ）（祓いのこと）を行う際に奏上、されていた。

古神道や教派神道では、今もこの禊祓詞（天津祝詞）を使っており、現代の神社神道では、この天津祝詞をより簡略化した「祓詞」を制定して使っているが、それも平田篤胤大人の『毎朝神拝詞記』に基づいている。参考までに、全国の神社の大半を占める神社神道の祓詞を紹介すると、

「掛まくも畏き伊邪那岐大神

筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原に

禊祓へ給ひし時に成りませる祓戸の大神等

諸々の禍事罪穢有らむをば

祓へ給ひ清め給へと白す事を聞食せと

恐み恐みも白す」

となつてゐる。

平田篤胤大人は『天津祝詞考（大祓太祝詞考）』の中で、この禊祓詞こそが「大祓詞」の中の「天津祝詞之太祝詞」であるとして、非常に重要視していた。それ故に、禊祓詞あるいは天津祝詞と呼ばれている。それを受けて、平田派の影響の強い大本教系の古神道教団では、今も大祓詞の奏上時に、「天津祝詞の太祝詞事を宣れ」の後、この天津祝詞を奏上しているが、それは大本の出口王仁三郎師が『大祓祝詞解説』中に於いてこの天津祝詞を、「天津祝詞太祝詞・すなわち御禊祓の祝詞の事で、正式に（大祓詞を）奏上する場合にはここで天津祝詞を奏上するのである。大体において述べると、あの